

## 教育活動という芸術

椋山女学園大学教育学部教授  
磯部錦司

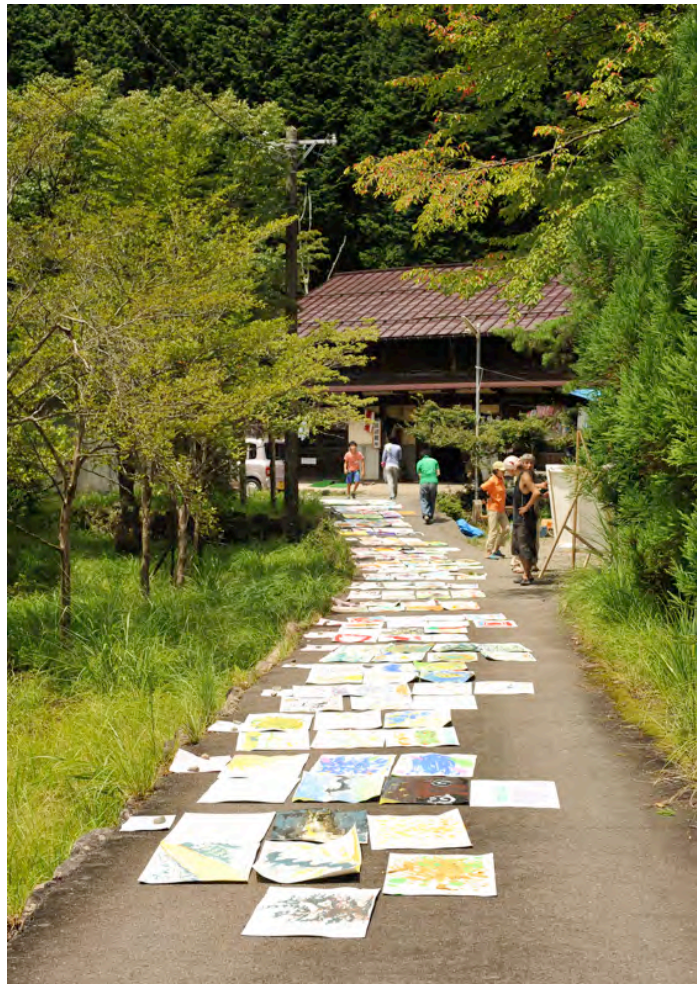


### 1. 教授法が大学を変える

日本高等教育開発協会（JAED）が「教授法が大学を変える」をテーマに取り上げた実践の中から、美術教育を扱った事例を現在の授業状況も踏まえ紹介します。

椋山女学園大学は、名古屋市にある7学部11学科4研究科からなる女子総合大学で、保育士・教員の養成課程では、長期的な学生の成長を見据え、「指導力と人間的な魅力を深める」ための教育をめざしています。今回取り上げる授業科目「ケースメソッド」は、その中で、専門知識を基盤に理論と実践を紡ぐ役割として位置づき、各担当教員の専門性に応じてテーマが設定され、学生の希望に応じて1クラスが20名ほどに分かれて履修します。その中の芸術活動を主題にした造形表現・図画工作のクラス（3年次）の内容です。

この授業の土台となるのは、山



中における 2 泊 3 日の岐阜県飛騨山中での「ぎふ・子ども芸術村」と、富山県五箇山での「利賀村ワークショップ」の活動です。「子ども芸術村」は、NPO が主催し、筆者がアドバイザーとなり連携して行っています。学生と子ども 50 名、音楽家、料理研究家、作家等が参加し、山中の古民家を拠点に生活共同体をつくり「芸術の共同体」を創造していく活動です。「利賀村ワークショップ」は民宿に泊まりながら村の生活を共にし、村の保育園・小学校において学生達の企画と準備において行います。これらの授業の主眼は、芸術活動での子ども達の行動や学生によるワークショップを「ケース」として扱い、そこでの子ども達の行動や作品の観察や分析を学生に行わせる事にあります。「子ども芸術村」では、子どもの表現活動を援助しながら、参与観察することでエピソードの収集を行い、活動後にそれに関する討議を行い、また、子どもの絵や作品を生活、実態、内面との関連性から分析します。また、「利賀村」では、活動毎にエピソードを討議し分析していきます。このような直接的な体験と観察や分析のプロセスを通して、学生達は、人間（子ども）とその文化や生活との関わりについて本質的な理解をすることが可能になり、人間生活の中に生まれる原初的な文化の発生に気づきながら新たな発見を繰り返し思考していきます。

## 2. 芸術共同体の創造—事例「ぎふ・子ども芸術村」—

これらは教育活動そのものが社会において意味を生成する創造的な芸術活動だと捉えています。今回は、「ぎふ・子ども芸術村」の事例からそのプロセスについて紹介します。芸術村自体のねらいは、『『アートが社会を変えていく』という考えから、自然環境の中で、想像力・創造力を育む活動を継続していくこと』です。この事例では、子ども達と学生が創り出す空間や時間、活動や生活そのものが芸術となっていきます。その参与観察をもとにした事例分析から「子どもと芸術活動」、「人間と文化や生活」との関わりについて理解を深めていくことが授業でのねらいとなります。

### (1) 「環境との一体化」

子ども達は、拠点となる古民家に到着すると、まず非日常的な川や森という空間で、時間をかけながらそこに自分の居場所をつくるように遊びを展開していきます。居場所を





得ることによって非日常的な空間は日常的な空間に変容することが考えられます。そのためには、十分に关われる時間と、主体的に関わりたくなる空間の保障が要件となります。特に本事例では、事物との直接的な関係によって子ども達は造形を生み出していきます。その要件が保障されることによって、子ども達は、古民家を拠点に河原や森に造形活動を発生させ、生み出していきます。

## (2)「個の想像的世界の形象化」

次に、自然や他者の生命との関わりにおいて「マイ・ストーリー」が生成されていく段階です。十分な時間と環境が保障されることによって、彼らは、自発的にイメージを形に作りだそうとしていきます。自然環境の中にある材料の豊かさが選択の幅を広げ、それ以外に準備する材料は参加するアーティストの専門性によって異なります。これまでに参加した作家は、立体作家、和紙作家、陶芸家、木工作家、染め物作家、版画家等でした。参加した音楽家は、和太鼓奏者、ギタリスト、サックス奏者等です。ここでのアーティストの役割は、「非日常的な出会い」を子どもに提供し、同じ時空間に生活する共同者であることが求められます。生活を共にする中で「アーティストの存在」が、子ども達に新たな想像と行為をわき立たせ、子ども達の行為と空間を変貌させ、「存在そのもの」に意味が見出されていきます。和紙作家の例では、植物から紙が作られていく様子を見せた時の彼らの驚きが、自らの主体的な創造活動へと結びつけられ、陶芸作家が、野焼きで火を焚き、作品が灰の中から掘り出されたとき、子ども達は作品に感動を抱き、その作品を大切に自分たちの隠れ家に飾りました。また、ミュージシャンが生活の中で何気なく奏でた打楽器の音に真剣に耳を傾けた子ども達は、いつしか、遊びの中で枝や棒をつかって自分たちでリズムや音をつ



くりだしながら遊んでいました。アーティストはこの空間では環境であり、創造を助勢する協力者であり、「生活の共同者」となります。この空間で重要なことは、子ども達だけでなく学生もアーティストも制作し共同体の成員として関わっていることです。

### (3)「環境の芸術化」

河原や森や古民家の周辺に子ども達の出来事が生まれていく過程で、そこに出来上がる造形はその空間の中で風景と融合し風景が芸術化されていきます。

水遊びを繰り返す河原に色とりどりの布の端切れや毛糸を用意すると、それらを結んでつなげ、長い紐にして流し、橋に布を結びつけそこに水を流し、川の流れの中に子ども達の造形ができあがっていきました。河原の風景は、たちまち彼らの手によって変化し、子ども達は、「空と大地と川と自分たちの造形がつながった風景」を橋の上から嬉しそうに眺めていました。環境化された造形は生活空間の至る所に生み出されていきますが、その内容には、森の隠れ家が風景化していく状況や、自然物でつくった作品を風景の中に置く等、子どもが活動する過程において発生的に作品が環境化されていく場合と、大人やアーティストの意図によって古民家やその周辺に子どもの造形を飾り環境化していく場面とがあります。前者は主体の意志において事物を環境との包括的な世界において見ようとしているものであり、後者はその見方への広がりや環境として提供するものですが、その見方や感じ方の広が





りは子どもに委ねられます。何れにせよ、両者において重要となることは、その出来事や風景が統一体の状況として捉えられているかどうかということであり、その意図において、古民家やその周辺の環境となる風景は連続する子どもの表現によって変容し続けていくのです。そして、連続した活動の中で、古民家を中心とした芸術村の環境のすべてはその環境自体が一つの作品として芸術化され、子どもや学生は「芸術化された環境（作品）の内において生活を営為するという状況」を生み出していきます。

#### (4) 「生活の芸術化」

子どもと専門家（造形、音楽、料理、環境、教育）とファシリテーターとなる学生の共同参加によって連続していく表現活動は、さらに生活そのものを芸術化させていきます。

ここでは、「食」の空間や時間も芸術となっていきます。料理がつくられ、生活の中で子ども達は、拾った葉をカラーージュしてテーブルクロスをつくり、料理をディスプレイし、枝でつくった箸でそのご飯をいただきます。また、山中での生活は、詩的な出会いもあれば、雷や森の闇夜や怖さもあります。山中の闇夜の中を散歩し、一斉に光りを消してみると、夜の森の音や川の音が聞こえてくる等、日常に無い自然界の様々な出来事と出会います。このような豊かな出会いのある生活と表現とを結びつけていくことによって、その生活が意味づけられます。木



作家が参加した家づくりの場面では、森の間伐材や自然素材と関わりながら、庭に木の家ができ、その家は庭の中の風景となり、子ども達は家の内や外を飾りながらそこを拠点にして遊びを生み出し継続させていきました。同じように、和紙作家が参加した場面では、和紙の原料からオブジェをつかって庭に飾り、お面や服をつくり、それを着衣し、火を囲み、踊り、お祭りごっこが展開していきました。さらに、音と関わる事例では、自然環境に聴こえる音を録音機で集め、その音を絵に表し、ミュージシャンと音をつくり、ミュージシャンが奏でる音を絵に描き、ミュージシャンはその絵を音にして演奏し、表現は連鎖し音楽のある生活が生まれていきました。これらに見られる生活の特徴は、感じることの豊かさであり、環境との豊かな出会いが出来事を豊かにし、事物や身体や音をとおして形象化が連鎖して試みられていく連続性に見られます。その中で学生は子どもと共に芸術活動を連続させていきます。

#### (5)「社会的創造活動の芸術化」

本事例の生活において基盤となっている考えは、「いのち観」を中心に、衣食住を含むすべての生命活動において芸術活動を連続させていくことです。和紙作家は、原料となるアオイトロロを砕き、楮を水に溶く過程で、「紙は土の中にある根っこや植物の皮からできている」ことを伝え、陶芸家は、炎で焼成し、灰の中から自分の作品を取り出させる過程において、「炎をとおしていのちが宿るように土が生まれ変わる」ことを伝え、まだ熱い灰の中から大切に作品をとり出させました。また、ここでの食生活は、広い視野で「いのち」





を考えるマクロビオティック料理の専門家が関わり、食物が循環する知を子どもも学生も広げていきます。

子ども芸術村の企画は、大きく2段階において構成されています。1段階目は、共同生活によって芸術の共同体を生成し、第2段階となる事後では、「アートが社会を創造する」とする考えにおいて、地域の美術館や施設において作品と活動の記録を展示し、映像作家が記録した子ども達の活動を上映し、社会に発信していきます。この一連の活動の目的は、「自然や他人と共存し、新たな見方や感じ方をもって文化を共に創りだしていくための礎を育て、子どもの活動を起点に社会を創造していこう」とするところにあります。ここでは活動の全体そのものが社会的な創造活動であり、その生活と活動のプロセスの全体が「社会的創造活動というアート」として考えます。

このような取り組みは、特別な活動に見えるかもしれませんが、日々の日常の園・学校においても実はそれは同じはずではないでしょうか。確かに、園や学校は子どもを育てる場であることは間違いありませんが、同時に、園や学校は、「文化を創り、社会を創造していく場」でもあり、生活共同体をとおした空間やプロセスそのものが、子どもを育てると同時に、間接的には、社会を創造していく活動となっていくことが期待されます。

